

救いの裾野

丸山 勉

[聖書] マタイによる福音書1章1～17節

アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブを、アミナダブはナフシオンを、ナフシオンはサルモンを、サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、ソロモンはレハブアムを、レハブアムはアビヤを、アビヤはアサを、アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。バビロンへ移住させられた後、エコンヤはシャルティエルをもうけ、シャルティエルはゼルバベルを、ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、エリアキムはアゾルを、アゾルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である。

[序] 新約聖書の冒頭にある「イエスの系図」

聖書朗読をありがとうございました。カタカナばかりが延々と続く名前の羅列を滞りなく読むことは大変なことです。三浦綾子さんも『新約聖書入門』という本の中で、まだ信仰を持つ前、聖書を読むように勧められて開いたところ、この新約聖書の第1ページの「イエス・キリストの系図」が目に入り、「何と愛想のない書き出しか」と面食らったというようなことが書いてありました。確かにこの出だしの部分で、随分多くの人たちが「聖書は壁が厚い。自分のような者は跳ね返されてしまう」と思ってしまうと思います。

けれども、聖書に触れて段々とわかっていくことは、聖書には無意味なページなどないということです。特に、このイエス・キリストの系図が、言ってみれば**旧約聖書と新約聖書の架け橋**となっていることは、大きな意味があることだと思うのです。そして、この系図は、今、**クリスマス**を迎えようとするこの時、単なる名前の行列ではない恵みの奥行きを私たちに示してくれていると思います。

[1] なぜ「系図」が必要なのか

「系図」が記録されているということは、普通に考えて、**血の繋がりの歴史**があるということであり、**おとぎ話ではない**ということです。（そこが、例えばサンタクローズなどとは違う点です。）**旧約の預言は成就した。歴史がそのことを証している**ということです。しかし、私たちは知っています。そして、信じています。イエス・キリストというお方が、神の御子（神様の独り子）であるということ。

では、イエス様が神の独り子であるなら、なぜ「系図」が必要なのでしょうか？神様であるのに。確かに無くてもいいのかもしれませんが。1：18 から始まった方が取っ付き易いのに、とも思います。

けれども、マタイ（或いはマタイが所属していた当時の教会）は、イエス・キリストの生涯の物語を書き始める前に、どうしてもこの歴史を書きたかったのだと思います。一つは、このマタイ福音書は、紀元一世紀の後半、**イエス・キリストを信じたおもにユダヤ人たちに宛てて書かれた**とされています。彼らは、それまでの**伝統的なユダヤ教徒たちの攻撃にさらされていた**ようです。ユダヤ人にとって、神様とは、主とは、どこまでも超越的な方であって、その神様の名前を口に出す事自体畏れ多いことであり、神が人間の姿をとる（正にクリスマスの出来事ですね！）ことなどあり得ないと考えていました。

しかし、マタイは、福音書を書く時に、この地上に到来したイエスこそが**旧約聖書が預言していたメシア**であることを伝えたかったのです。1：16 には、「**メシアと呼ばれるイエスがお生まれになった**」と明確に記しています。これは、マタイの、そして当時の教会の「**信仰告白**」です。ある意味、命懸けの言葉です。

[2] この系図の特徴—「まことの神にして、まことの人」

イエス・キリストというお方は、肉体を持った一人の人間であることは事実です。けれども彼は、一イスラエル民族の救いというものを越えた、**全世界の救いをもたらすために神様が遣わして下さった「神の子」**です。神ご自身に等しいお方です。神学用語の重要な信仰告白で、イエスは「**まことの神にして、まことの人**」であるという言葉がありますが、正にそのことをマタイは伝えたかった。それで、ユダヤ人が最も大切にしている「**神様の恵みの選び**」ということ、その**神様の約束の確かさがイエス様において実を結んだ**ということ、まずユダヤ人たちに伝えようとしたのです。

具体的にこの系図を見て参りますと、これは、単純な**血の繋がりを示す系図ではない**ことが分かります。古代のユダヤ社会は、典型的な**家父長制**です。そして**長男**がその財産・祝福を受け継ぎます。ところが、ここに記されているのは、長男だけではありません。初めのほうに出てくる**ヤコブ**も双子の弟ですし、その子**ヨセフ**も、また、**ダビデ**も、それぞれ長男ではなく、末っ子に近い子供です。

そしてまた、この系図は、ユダヤの権力者、つまり**王の系図でもありません**。確かにダビデ以降の第二セクションは王の系図のように見えますが、最初の王であるサウルは書かれていません。また、イスラエルの歴史で、王制は途中で途絶えます。**北王国はアッシリアによって。南王国はバビロン捕囚の出来事によって**。そして、この系図の第三セクションである、バビロン捕囚以降に書かれている名前は、王様どころか、もう殆ど旧約聖書にも名前が残っていない者たちです。**無名の人々の羅列が続**き、そこに、あのマリアと婚約した**ヨセフ**が出てきます。

さらに、この系図には、**極めて目立つ特徴**があります。それは、このユダヤ人の男系の系図の中で、**5人の女性たちの名前**が記されていることです。初めの方から名前を挙げますと、**タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻(=バト・シェバ)**、そしてイエス様を宿した**マリア**です。マリアのことをこの系図に入れるのは母なので理解し易いですが、あとの4人たちは、意図があってこの系図の中に入れたに違いありません。

普通、「系図」と言うのは、恥になるようなことは省いたりすることがあると思います。逆に自慢できる立派な功績を残した、とかでしたら書きたくもなるでしょう。では、この4人、タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻は、男の系図の中にあって、どんな意味を持っているのでしょうか？——旧約聖書を読んで見ますと、**タマル**は、義父と近親相姦を犯して子どもをもうけた女性、**ラハブ**は、カナンの遊女=売春婦、**ウリヤの妻**は、王ダビデと不倫関係に陥った女性で、その後ソロモンを産んだりしています。そういったところから、イエスの系図の中には、**罪と恥を負った女性たちの名**を隠さずに記し、その**イスラエルの罪の歴史**と言っていい、**全歴史**を引き受け、赦すために、まことの救い主としてイエス様は来て下さったのだ、という捉え方があります。確かにそういう一面があるのだと思います。

けれども、それだけなののでしょうか？そういう道徳的・倫理的な救いだけを語るためにイエス様の系図は描かれたのでしょうか？もう一人の女性がいました。**ルツ**です。彼女は、ユダヤ教の伝承では、敬虔で、何ら汚点がない女性として評価されています。ルツ記は美しい物語ですね。また、先ほどのウリヤの妻バト・シェバの罪にしても、権力を用いて彼女を引き寄せ、挙句の果てはその夫を戦場で殺させた**王ダビデの罪のほう**が、**まず問われるべき**でしょう。

では、この女性たちは、なぜ名前が載っているのか。それは、この4人が**皆ユダヤ人以外の者=異邦人である**、という**事実**からのようです。タマルも、ラハブも、カナン人です。そしてルツは、ユダヤ人が嫌った**モアブ人**、ウリヤも**ヘト人**であって、その妻バト・シェバも異邦人の身分です。これは、**自分という存在の根幹に関わる**ことでもあり、どうしようもないことです。

マタイ福音書が書かれた当時も、ユダヤ教徒からすれば、異邦人は救いの外にいる者たちとされていました。しかし、神様の救いのご計画は、そのような枠に縛られるものではなかったのです。神様ご自身が、その枠を取り払われてしまいました。それが、イエス・キリストの誕生ということです。「すべての人を救う神の恵みがあって、世に来た」(ヨハネ 1:9) のです。マタイが属していた教会には、もちろんユダヤ人たちも沢山イエス・キリストを受け入れた人々がいましたけれども、異邦人たちも神様の招きに応じて、イエス様を主と告白し始める者たちが多く加わっていたようです。多文化の、多様な人々が集まる教会が始まっていたのです。ですから、マタイは、系図の中に異邦人たちの名前も入れながら、神様の不思議な恵みのみわざを賛美しているのです。

このイエス・キリストの系図。ここに最後に登場するのが母マリアです。これまでの流れならば、父である「ヨセフによって」イエスが生まれた、と書くべき所を「マリアによって」と書いてあります。凄いことです。つまり、このイエスというお方は、ヨセフによる子ではなく、神様が母マリアの胎内に、聖霊によって与えられた子であることを大胆に示しているのです。イエス・キリストは、「まことの神にして、まことの人」だと。この系図は、人間の筋書きを超えた、正に神様の筋書き、神様のドラマなのです。そして、大切なことは、この系図に続くものとして、私たち自身も、イエス・キリストの故に、神の子とされている、その約束を受け継いでいる、ということです！

[3] 私たちも「アブラハムの子」

この系図は「アブラハムの子」という言葉から始まりました。「アブラハムの子」と言うのは、端的に言えば、「信仰の子」ということです。創世記に「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」(15:6) とありますけれども、それは神様の約束に対する絶対信頼です。自らの不信仰や、疑いの思いに抗ってでも、神様の自分に対するお約束を信じること。そこに神様は救いを与えて下さる。神様はこの恵みは無償で与えて下さる。いや、既に与えて下さったのだ、イエス・キリストの到来の事実によって。あとは心を開きさえすれば良いのです、と聖書は語ってくれているのではないのでしょうか。

神様はその独り子イエス・キリストをお送り下さるまで、どういう思いで人間の営みを見てこられたのだろう、とすることがあります。怒り心頭で見たのではないかと思います。或いは、もう見たくない、と目を覆うような嘆き悲しむ思いを持って見ておられたのではないかな、とも思います。けれども、神様は、強情で不信仰な民に向かって、終日手を差し伸べておられたということも旧約聖書に書いてあります。神様は一度選んだ民を、決して見放さず、その歴史を終わらせることはなさいませ

んでした。もし終わらせようと決意されれば、そう出来る根拠をお持ちのお方だと思います。しかし、神様の、人間に対するなさり方は、驚くことに、徹底的な「赦し」でした。

新約聖書「ヘブライ人への手紙」の冒頭にはこう書いてあります。1：1～3です。

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、（＝つまり赦された後）、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。」

「この終わりの時代」と書いています。歴史の最終局面ということです。だから、神様は、唯一・決定的な救いとして、御子、つまりイエス・キリストを、あなた方と共に歩む神として与えるのだ、ということです。事実、十字架と復活によって、イエス様はすべての人類への「赦し」をもたらして下さいました。ご自分が身代りとして神様に裁かれることによって、私たちの存在を、罪あるままで「わたしの命をあなたに与えるから、その命を持ってわたしと共に生きよう」と肯定して下さいました。

[結] イエス・キリストという頂点から、その裾野を見る

イエスの系図に秘められた旧約聖書の歴史。そこには、不道德な罪も蔓延していますけれども、私は、そういうことから見えてくる人間の弱さ、或いは絶望や悲しみといったものを、神様は全部受け止められていたのだ、ということを思うのです。

そして系図は、ただ歴史だけではなく、拡がりを持っていると思うのです。まるで富士山の裾野のように。様々な人物の生きる中の葛藤を聖書から知らされます。兄弟の裏切りに遭いながらも、忍耐強くしなやかに生きたヨセフ。若くして旦那さんを亡くし、けれども落穂拾いをする中、出会いを生かして美しく生きたルツ。巨人ゴリアテを倒して喝采を受けたダビデ。しかし王となった彼は、謀反を起し命を狙う自分の子アブシャロムを失い、号泣したりもしています。様々な人間模様と悲しみ…。

系図の中には、無名の者たちも多くいました。そして、背後にはその家族も当然いたわけですから。エジプトでの奴隷生活。繰り返される戦争。偶像礼拝の裁き。バビロンの捕囚。人間は否応なく、その時代や政治に翻弄されます。不本意な生き方を強いられることもあります。それを神様は、ずっと寝ずの番をして見ておられるのです。また、当時、癒しがたい病を抱え谷底に住むような人々、共同体から排除されざるを得ない人々も多かったわけですから。

またこの系図の中に、いわゆる LGBT の者たちがいなかったということも言えません。公に言えなくて苦しむ者たちも少なくなかったに違いありません。けれども、神様はその一人ひとりを放って置かれる方では決してありません。否、**憐れみに胸を焦がされるお方**です。ですから、**インマヌエル＝同伴して下さる救い主イエス・キリスト**を、この終わりの時にお送り下さったのです。ここから、この**主イエス**という頂点から、**私たち自身の歴史**も振り返ってみましょう。**恵みの裾野**がどこまでも広がって、私自身の大きな罪も、小さな罪も、悲しみも、憤慨も、嘆きも、みんなイエス様の愛の中に包まれ、赦されていることを見る事が出来るのではないのでしょうか。

そしてそこには、**多種多様な人格と存在が、あるがままで祝福を受けている**のです。そのことが決定的になった出来事が、クリスマスなのではないのでしょうか。

私は、週報にも書かせて頂きましたけれども、バッハの「**いざ来ませ、異邦人の救い主よ**」という**アドベントのカンタータ**をこの時期必ず聞きたくなります。その第一曲の合唱曲は、この後歌う**讚美歌 156 番**の歌詞です。是非、心を込めてご一緒に歌いたいと思いますが、週報に紹介させて頂いたそのカンタータの第五曲のソプラノの aria の歌詞をご紹介します、お祈りしたいと思います。

「開け、私の心よ、隅々まで余すところなく。

イエスが来て、お入りになるのだから。

ちりと土くれに過ぎない私のような者を、主は軽んじることなく、

私に会うことを喜びとし、私のもとに住居を定めて下さる。

おお、私は何という幸いなことでしょう。」

アーメン。

お祈りいたします。

神様、あなたの前に今静かに頭（こうべ）を垂れます。

あなたの恵みは、私たち一人ひとりの人生すべてを貫いていることを思い、心から感謝申し上げます。

主よ、あなたに向かって今、心を開きます。私の心を飼い葉おけとして下さり、そこにどうぞ、あなたがいのちを宿してください。

あなたは、まことの神にして、まことの人。この救い主をご一緒にこのクリスマス、賛美し、また御前にひれ伏し、その恵みを心に刻むことが出来ますように。

全世界の人々に、またこの川越に地に住む者に、この光が届きますように。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン。